

# 美術科における習得・活用を意図した授業のあり方

美術科 西澤 明

## 1. 美術科における習得・活用を意図した授業について

### (1) 「習得」「活用」の位置付け

学習指導要領およびその解説書には、「習得」「活用」という言葉が、その他の言葉（例えば「基礎的・基本的な知識・技能」「思考力」「判断力」「表現力」「言語に関する能力」など）と共に、その文章中のあちこちに記されている。しかし長い文章中に散見されることもあって、その本来の意味が不明瞭なまま、言葉だけが学校現場の課題として取り上げられることになりがちである。はじめに、学習指導要領における「習得」「活用」という言葉の位置づけを今一度確認したい。

新しい学習指導要領では、その総則で、現行の学習指導要領で示された「生きる力をはぐくむ」という目標が継承され、示されている。その実現のための重要な要素として、さまざまな課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うこと、個性を生かす教育の充実に努めることと示され、思考力・判断力・表現力等の能力をはぐくむための教育活動として、「基礎的・基本的な知識・技能を習得」させ、「基礎的・基本的な知識・技能の活用」を図る学習活動を重視し、指導計画を作成するように示されている。その際配慮すべき事柄として、「言語活動の充実」が示されている。まとめると以下のようなになるだろうか。

#### ● 生きる力をはぐくむ

→ その実現のための教育活動

- 思考力、判断力、表現力等の能力（課題を解決するために必要な能力）をはぐくむ
- 主体的に学習に取り組む態度を養う
- 個性を生かす教育の充実に努める

→ 思考力、判断力、表現力等の能力をはぐくむための教育活動

- 基礎的・基本的な知識・技能の習得とその活用を図る学習活動

※ その学習活動の際配慮すべき事項

- 言語活動の充実

つまり、習得、活用について考える際には、「基礎的・基本的な知識・技能の習得と活用」それ自体が目的なのではなく、その活動を通して、「課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の能力をはぐくむ」ことが重要だという点をあらためて押さえておく必要があるだろう。

次に、美術科における習得と活用について考えてみる。

### (2) 美術科における習得・活用

前述の通り、習得と活用を意識した授業について考える際には、「課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等の能力をはぐくむ」という観点が重要であるが、美術科における学習活動はそもそも思考、判断、表現の活動そのものである。

美術科の学習活動には表現、鑑賞の2つの活動の柱があるが、いずれの活動も授業の最初から終わりまでさまざまな場面で感じ、考え、選び、決定するといった「思考」「判断」が繰り返されたのち、最終的に自分独自の意図や方法により、表現活動においては作品(視覚化)などの形で、鑑賞活動においては感想(言

語化)などの形で「表現」される。当然その活動を通して子どもたちはそれまでに身につけてきた知識・技能を「活用」しており、そこでは思考力、判断力、表現力等の能力の伸長が実現されているはずである。さらに、子どもたちが自ら求める表現をよりよい形で実現するためには新たな知識・技能が必要であり、それを追求、学習し、「習得」する活動も随時行われているのは間違いないだろう。教師の役割は子どもたちのそうした学習活動における活用の場面を支援し、必要とされる知識・技能の習得に応じた教授を行うことだと言える。

しかしここで問題になるのは、その学習活動において子どもたちが必要とし、求める基礎的・基本的な知識・技能が、往々にして一人ひとり違ったものになる点である。もちろん単元や各時間の授業における学習活動を計画する際は目標の設定が何より重要であり、その学習活動で習得すべき基礎的・基本的な知識・技能は、当然具体的な目標として設定されていなければならない。しかし実際の学習活動においては、子どもたちが自分独自の意図をしっかりと持ち、その実現に向けた思考、判断を主体的に行えば行うほど、教師が設定した目標を超え、異なる知識・技能を必要とする場合が多い。

水彩絵の具を使って緑の葉をスケッチする教材を例にとってみよう。教師の設定する基礎的・基本的な知識・技能の目標が、例えば「葉の緑色の美しさに気付き、その幅広い緑色を表現する」という、色に対する感性や絵の具の扱いに目を向けたものであったとする。しかし、ある子どもは画用紙のどの位置に葉を描くかといった構図について関心を持ち、深く考えるかもしれない。別の子どもは構図についてはあまり関心を持たず、ざらざらした葉の触感を表現することに意識を集中させるかもしれない。子どもたちがそうしたそれぞれの活動に取り組むことは、確かにそれまでに体験し、習得してきた知識・技能を活用し、新たな知識・技能の習得という学びを体験することになるのは間違いなく、教師はそうした子どもたち一人ひとりの学びを支援し、教授する。こうした状態は決して悪いことではなく、むしろ子どもたちが積極的に活動に取り組む姿勢は素晴らしいことではあるが、その学びは、授業における学習活動として意図的に指導計画されたものではなく、活動に付随した偶発的なものである場合が多い。美術科における習得・活用の問題点は、教師がそうした偶発的な学びに依存してしまい、計画的、意識的に基礎的・基本的な知識・技能の習得の方策を図ったり、それを3年間の中で体系的に関連付けたりしようとする意識が弱弱点にあるように思われる。

## 2. 習得・活用に関する本校生徒の実態

ここ数年間、美術の授業の中で西澤が問題としてとらえているのは、より美しい仕上がりを求める中学生の発達段階に対して、それを実現するために必要な基礎的・基本的な知識・技能の習得が不足している点である。とりわけ画材、技法についての基礎的・基本的な知識・技能の理解、定着が大きく不足している子どもが多くなっている。特に表現活動で実際に作業を行う際には、最低限必要と考えられる「描く」「塗る」「切る」「貼る」といった「技能」が習得されておらず、作業が確実に行えない子どもが多くなっている。その一方、多くの子どもたちが表面的な美しさや、商・工業製品のな仕上がりを求める傾向にあり、基礎的・基本的な知識・技能の理解、定着の不足と相まって、求めるイメージの実現が困難という状況を生み出している。

以前に子どもたちからとった絵の具の色塗りに関するアンケートでも、「やりたいけれど自分にはできない、ここが苦手というあなたの弱点を教えてください」という設問で、子どもの回答に大きく2つの傾向が見られた。1つは「ムラなく塗りたい」「はみだしてしまう」「まっすぐ塗るのが苦手」といった声に代表される、色塗りが苦手という意識。もう1つは、「模様をつけたい」「グラデーションがしたい」

といった、より高度な表現を行いたいという意識である。この二つの意識は、一言で言えば「できない」のに「してみたい」という一見高望みとも思えるものだが、逆の言い方をすれば「してみたい」が「できない」わけで、ここにこそ授業で応えなければならない子どもの欲求が現れているともいえそうである。

このような現状の原因については、これまでの授業が新しい知識・技能の学習だけを活動の目標に設定し、その実現に不可欠な知識・技能の不足については偶発的な学びに依存し、目標に設定してこなかった点に問題があるように思う。習得・活用を意図した授業を考える際には、単に新しい知識・技能の学習にとどまらず、子どもたちに必要な基礎的・基本的な知識・技能がどのようなものかを見極めたうえで、その習得を確実なものにしていく目標の設定や教材計画、授業のあり方が必要ではないだろうか。

### 3. 習得・活用を意図した授業実践

#### (1) 絵の表現活動における習得・活用

中学校では授業時間数の減少にともなって2時間続きの授業がなくなってきており、移動や準備・片付けに手間と時間がかかる写生の単元は活動しにくくなってきている。それと同時に、手間や時間がさほどかからずに行えるデザイン領域の活動が増えているように思う。写生とデザインでは、もちろんその表現方法や用いる絵の具、用具は異なるが、実際には、多くの学校で生徒が使用する絵の具がポスターカラーやアクリルガッシュになり、それだけですべての活動を行っている場合も少なくない。写生とデザインの両者を大きく絵の表現活動としてとらえたとき、双方における共通した目標としての基礎的・基本的な知識・技能を考え、その習得を図ることが必要だと考えた。

そこで、子どもたちの現状を踏まえ、絵の表現活動に必要な基礎的・基本的な知識・技能の1つとして絵の具や筆の扱いに関する学習を取り上げ、その内容の整頓、学習活動の目標への位置付けを行い、計画、実践を行うことにした。活動の目標としては、基礎的・基本的な知識・技能の確認と習得を中心とし、具体的な内容としては「絵の具を溶く」活動と「絵の具を塗る」活動に分けて考えた。「絵の具を溶く」段階では、「適切なパレットの使用方法」「絵の具と水の量の配分による状態（隠ぺい度、筆運び等）」「色による主色と加色の決定」「ムラのない混色の方法」を、「絵の具を塗る」段階では「筆の選択」「筆の持ち方」「運筆（方向、角度）」を基礎的・基本的な知識・技能と位置付け、その習得を図った。

#### ① 絵の具を溶く活動

「絵の具を溶く」段階では、作られる絵の具の量とその状態が制作を大きく左右する。子どもたちに見られる問題点としては、まず、作られる絵の具の量が少ないため、一つの色面を塗っている途中で作り足すことになり、塗られた絵の具にムラが生じる問題が挙げられる。塗りたい面積と絵の具の量の関係についての経験が少ないことが最も大きな原因ではあるが、パレットを使用する際、多くの子どもたちが小さなマスを使って絵の具を溶く状況もその原因になっている。絵の具を出すのがもったいないという意識があるらしいが、大きなマスを使って多めの絵の具を溶き、もったいないと思わずに余らせる量を指示することで、解決が図れた。

次に、絵の具を溶く水の量が適当ではない子どもが非常に多い問題が挙げられる。水が少なくベタベタで塗りにくかったり、逆に水が多すぎて下描きの線が消えなかったりするわけだが、子どもたちはあまり意に介さず、そのまま作業を進めている場合が多い。これも絵の具の状態によって絵の様相が変わる経験をさせる活動が少ないことが原因として考えられるが、これまで教師が無意識のうちに指導してきた水の量の調整といった単純な作業について、あらためて具体的な指示を出して一斉に試作してみるような活動が必要になっている。

2色以上の絵の具を混色する際にも問題が見られる。絵の具を完全に混ぜ切らず、例えて言うならマーブル状のまま使用する子どもが多い。確実な指示が必要である。

さらに2色以上の絵の具を混色する際、意図する色を作るために、ある色に別の色を少しずつ加えて絵の具の割合を調節するわけだが、明度の低い絵の具を主色にし、そこに白や黄色など明度の高い色を加色する混ぜ方をする子どももいる。この方法だとなかなか明度は上がらず、いたずらに混色された絵の具の量だけが増えることになるが、途中で気がつく子どもは稀である。いったんストップをかけ、パレットの別のマスに加色していた明度の高い色を出させた上に、できあがってしまった絵の具を少しずつ加えていくように指示を出す必要がある。

こうしたこと以外にも、机の上を整頓させたり、水入れやパレットの適切な置き場所を指示したりと、一から十まで指示をしなければ全員が同じスタートラインに立てないのが現状である。絵の具を塗る活動に入る以前に考えなければならないことは予想以上に多いのである。

## ② 絵の具を塗る活動

絵の具を塗る段階に入ると、さらに様々な具体的な問題点が明らかになる。まず始めは使用する筆の選択である。当然細かな部位は面相筆などを使用し、広い面積は平筆や彩色筆で塗ることが基本だが、それがなかなかできない子どもが多い。細かな箇所を平筆で塗ったり、広い面積を面相筆で塗ったりする姿は日常的によく見受けられるのである。この問題は知識・技能というよりも、子どもたちの口からしばしば聞かれる「面倒くさい」という言葉に代表される意欲のなさに起因するところが大きいように思う。

実際に塗り始めた子どもの様子を見て気付くのは、筆に含ませる絵の具の量の多さである。パレットの縁や水入れの縁で筆に含ませる絵の具の量を調節してから塗る。それも言わなければならない子どもが多いのは驚きだが、現実でもある。

まっすぐな線を塗ったり、はみ出さないように塗ったりするのに必要な技能は、「運筆」の方法であろう。ここでは様々な事柄を考えなければならないが、基本的には筆を動かす方向、画面と筆の角度、筆を入れる場所と止める場所といったことになるだろう。筆を動かす方向については上から下、右利きの場合は左から右が塗りやすい方向になるはずで、筆の側面が向かって左の輪郭線に沿うように、ある程度寝かせた角度で塗っていく形が基本である。ところが子どもたちの筆の多くは、書写のように垂直に立った形で運ばれる。その姿勢で塗ろうとすると、塗ろうとする箇所は手前に引かれることになり、覆い被さるような姿勢で描く姿になるのである。これについては、ある時鉛筆の持ち方がおかしい子どもが多いと感じた時に、その持ち方だと掌の中で立った状態になるのではないかと気が付いた。実際に筆を持つ手の形は明らかに問題があり、機能的な運筆には不向きだと考えられる。いずれにしても、美しい色塗りを行うためには、中学校段階でも姿勢や、筆の持ち方といった、基礎中の基礎から指導をする必要があるのは間違いないだろう。

## (2) 具体的な授業実践

### ① 「絵の具遊びから作る絵画作品」

1年生の入学後すぐに実施している教材。新しく購入する水性絵の具（アクリルガッシュ）の道具確認と、新しい材料・道具の使い初めにあたってのためらいを払拭するために実施している教材。教師が出す「米粒くらいの絵の具を、筆にたっぷりの水3杯で溶く」「丸を3個描く」といった指示に従って、画用紙（スケッチブック）に水性絵の具でさまざまな色や形を描画していき、最終的にできあがった絵の具の痕跡（模様）の集積から気に入った部分の矩形を切り取り、紙縁枠に入れて作品化、展示するもの。

使用する色や、画面のどこにどんな大きさ、太さで形を置くかといった、比較的単純でありながら、自分自身の感性によって決定しなければならない場面が多く、非常に大切な基礎的な能力が求められる活動である。連続する活動の一つひとつ行うことによって常に新たな状態に対峙することになり、それが活動の最後の状態まで続いていくよさがある。



「絵の具を溶く」段階では、「適切なパレットの使用法」「絵の具と水の量の配分による状態（隠ぺい度、筆運び等）」「色による主色と加色の決定」を、「絵の具を塗る」段階では「筆の選択」「筆の持ち方」を基礎的・基本的な知識・技能と位置付け、その習得を図った。

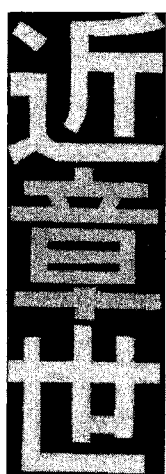
## ② 「レタリング表札」

自分の名前から三文字（漢字もしくは仮名）を選び、レタリング字典を手本に、10cm×30cmのシナベニヤ板材に拡大転写を行ったのち、水性絵の具（アクリルガッシュ）で着色を行う教材。完成後は一斉に教室前の廊下に掲示し、学級の構成メンバーの表札とする。

全学年同じ材料、描画用具で活動を行うが、1年時にはゴシック体を用い、絵の具をムラなくはみ出さずに塗ることを目標にし、基礎的・基本的な知識・技能の習得を図っている。2年時には明朝体を用い、色の学習を踏まえたのち、1年時の目標に加え、美しい色の組み合わせの実現を目標にしている。3年時には、手本を変形する方法を学習したのち、それまでの着色の活動で学んだ知識・技能を活用し、総合的に使った自由な発想による作品を制作している。



1年生



1年生



2年生



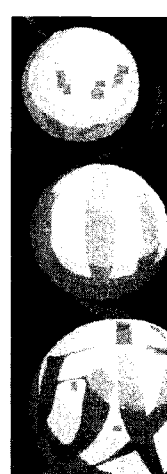
2年生



3年生



3年生



3年生

活動の目標としては、基礎的・基本的な知識・技能の確認と習得を中心とし、具体的な内容としては「絵の具を溶く」活動と「絵の具を塗る」活動に分けて考えている。「絵の具を溶く」段階では、「適切なパレットの使用方法」「絵の具と水の量の配分による状態（隠ぺい度、筆運び等）」「色による主色と加色の決定」「ムラのない混色の方法」を、「絵の具を塗る」段階では「筆の選択」「筆の持ち方」「運筆（方向、角度）」を基礎的・基本的な知識・技能と位置付け、その習得を図っている。

### (3) 「活用」の可能性について

前述のレタリング表札の教材では、3学年が同じ教材を扱うことで3年間を通して共通した学習活動が行われることになり、その活動で習得した知識・技能は翌年度に必ず活用されることになる。そして学習活動が繰り返されることにより、その能力は明らかに前年度よりも向上し、習得も深まっていくことになる。前年度の活動や作品と比較することで、本人もその伸長を実感しやすいと言えるだろう。

こうしたつながりは、「習得の上に活用が成り立っている」とも言えるが、ここで注目したいのは、完成後に作品が廊下に掲示されることである。自分を含む同学年の作品鑑賞だけではなく、上級学年の作品を自由に観られる環境は、上級学年の技能への憧れとともに、次年度の自身の制作に向けた目標を具体的に立てることができるよさがある。このことは、習得する知識・技能を活用する場が活動の前に示されていることでもあり、「活用の上に習得が成り立っている」とも言えるだろう。こうしたつながりが学習活動に対する意欲の向上につながっているのは明らかであり、今後、習得と活用を意図した学習活動を計画、実践する際の大きな可能性を示唆しているように思われる。

## 4. 成果や今後の課題

今年度については、「美術科の学習活動では習得と活用の学習活動が行われている」という前提に立ち、これまでの授業やその教材を再考察した。習得と活用を意図した授業、学習活動については、それを3年間という期間で考えるのか、学年の1年間で考えるのか、1つの単元の中で考えるのか、あるいは1時間の授業の中で考えるのか、様々な位置付けが可能である。さらに、それを発展的に位置づけるのか、同じ学習を繰り返して習得を深めるように位置づけるのかなど、その方法も様々である。今後は、そうした点を十分に整頓した上で計画、実践を行うことが重要だと考えられる。

さらに前述したように、よりよい習得を実現するためには、活用の先や方法をあらかじめ提示することが有効であると考えられることから、そうした授業、学習活動の形態についても考えていく必要があるだろう。

今後はそうした観点から、これまで進めてきた「美術科における基礎的・基本的な知識・技能の整頓、体系化」を進めていきたいと考えている。